

## 正誤表

誤：p21, 113 質量

正：p21, 113 質点

誤：p22, 13 PARADOXICAL

正：p22, 13 パラドックス的

誤：p23, 15 変更

正：p23, 15 変更。図と図番号を追加。注釈を ( ) 内に付記。

誤：p26, 14 定規

正：p26, 14 規定

誤：p30, 18 定規

正：p30, 18 規定

誤：p31, 117 (量子学的) 実験とわけている

正：p31, 117 または衝突実験と区別している

誤：p33, 16 振幅 2 乗

正：p33, 16 (11) 式の振幅 2 乗

誤：p33, 17 和周波数  $((k_1 - k_2)/2)$  がないことである。

正：p33, 17 差周波数  $(k_1 - k_2)$  しかないことである。

誤：p33, 17~9 またビート周波数も後者には差周波数  $(k_1 - k_2)$  そのものが現れる。古典場である電磁場でも干渉効果は (11) の形をとるので、

正：p33, 17~9 一方、(10) 式を 2 乗すれば  $2k_1, 2k_3, (k_1 + k_2), (k_1 - k_2)$  が現れる。この内  $(k_1 - k_2)$  項のみが観測容易な低周波数成分である。

誤：p33, 110 ではない。事実 (10) 式を 2 乗すれば (11) と同じ定数項と差周波数項が現れる。

正：p33, 110 というより観測において、この和周波 (高周波) を含むかどうかではないだろうか。

誤：p33, 113 振幅

正：p33, 113 振動

誤：p35, 数式 16

正：p35, 数式 16

$$\begin{aligned} \left| e^{i\mathbf{k}\cdot\mathbf{r}} + \frac{e^{i\mathbf{k}\mathbf{r}}}{r} f(\mathbf{k}) \right|^2 &= \left| 1 + \frac{1}{r} e^{i(\mathbf{k}\cdot\mathbf{r}-kr)} f(\mathbf{k}) \right|^2 \\ &= \left| 1 + \frac{1}{r} e^{i\gamma(\mathbf{k})} f(\mathbf{k}) \right|^2 \end{aligned}$$

誤：p35, 117  $kr = k \cdot r$

正：p35, 117  $k \cdot r = kr$

誤：p35, 125 図 4b に対応する

正：p35, 125 図 4c では、図 4b に対応するような

誤：p36, 最終行 すなわち

正：p36, 最終行 すなわち遠方での

誤：p37, 15 (波数)

正：p37, 15 (波数ベクトル)

誤：p37, 127 おくれを与える

正：p37, 127 おくれ ( $e^{-\frac{i\pi}{2}} = -i$ )

誤：p39, 12j 向上させた

正：p39, 12j 向上させた (特にコントラスト)

誤：p42, 18 遷移の確率

正：p42, 18 確率の遷移

誤：p42, 124 統計平均

正：p42, 124 1 個の粒子に対して統計平均

誤：p47, 128 70 696

正：p47, 128 70.696

誤：p47, 最終行 in press (2002)

正：p47, 最終行 J. Phys. Sa. Jpn. 71, 744-756